

# 日本のヒップホップに未来はあるのか！ — アメリカとの比較を通じて —

Does Japanese Hip-Hop Have a Future? —In Comparison with American Hip-Hop

中本 ぜ じ : 中本 サ イ フ ァ ー



## アメリカのヒップホップの歴史

1970年代初頭 ニューヨーク/サウスブロンクス地区で誕生

背景: ティスコブームの時代

- 高価なクラブに行けない若者が公園でブロックパーティーを開催
- DJ/MC/ブレイキン/グラフィティなど自由で創造的な空間に
- アフリカ系の若者の文化としてスタート

★暴力ではなく「音楽/アート」で自己表現

1979年 “Rapper’s Delight”が大ヒット

アンダーグラウンドからメインストリームへ

1980年代 Run-DMCやPublic Enemyらが活躍し世界へ

## アメリカの現状

大体の音楽ジャンルで売り上げ減少

→ 依然として約3割を占める (2022年データ)

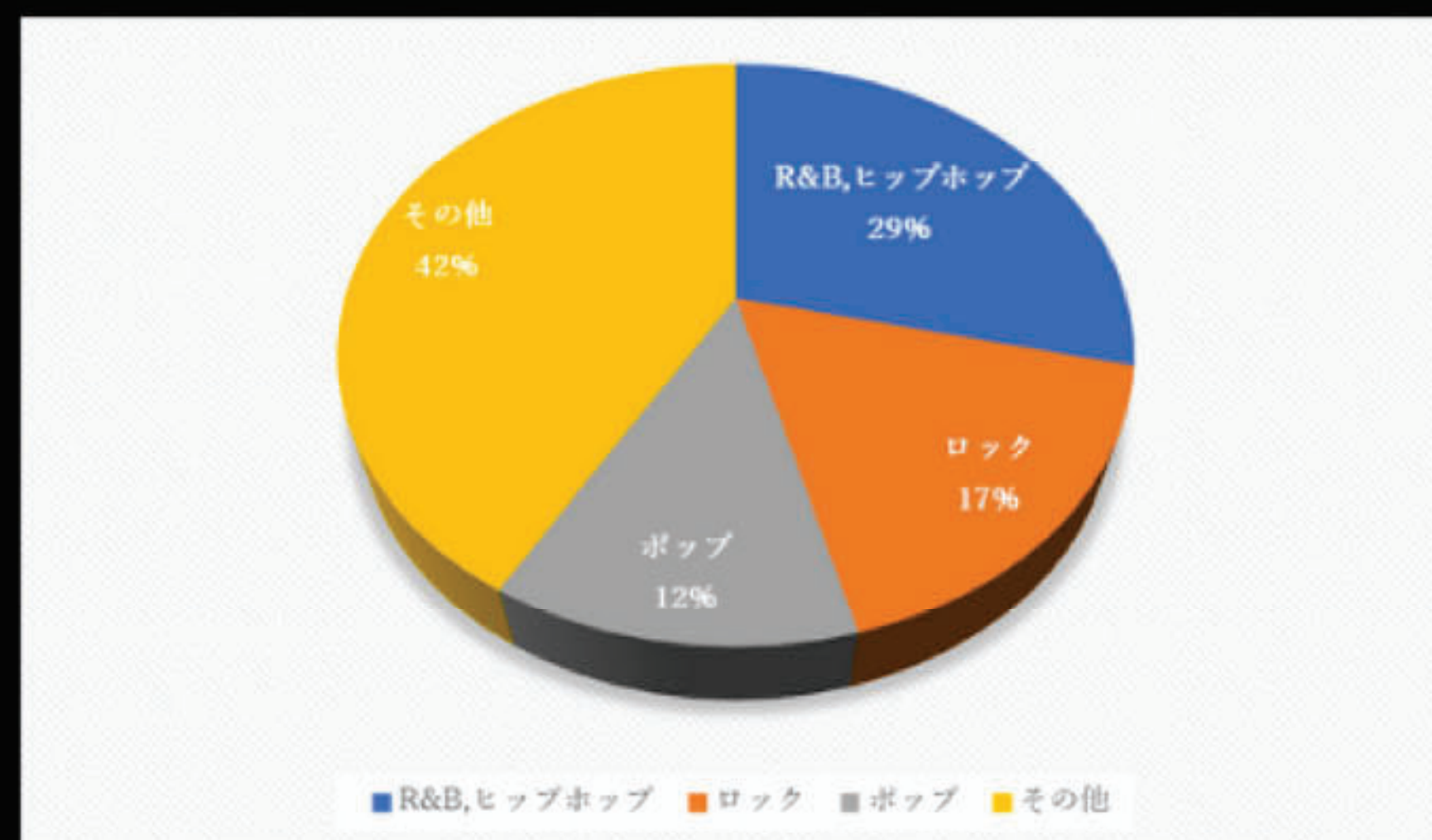
社会問題やストリートのリアルを語る音楽

現在の歌詞内容の傾向:

お金・恋愛・パーティetc

★アーティストによる社会問題への提唱、アイデンティティの表現

※データはオンデマンド再生数に基づく  
(U.S. YEAR-END MUSIC REPORT 2022 調べ)



Not Like Us /  
Kendrick Lamar

2024・5月/Drakeとの  
論争を背景にアフリカ  
系アメリカ人の歴史的  
苦難に言及。



エミネム:

- ・過激なワードを使いながらの強烈なラップ
- ・スリム・シェイティ (Slim Shady) という別人格を登場させることもある。



スヌープ・ドッグ:

- ・リラックスしながらリズムカルに韻を刻む



## 日本のヒップホップの歴史

1970~80年代: 黎明期

アメリカ文化の模倣から始まり国内基盤が形成

1990年代: 定着と拡大

社会的メッセージやファッションと結びつき、文化として広がる

2000年代: メジャー化と表現の深化

言葉やリズムで個性を競うライブ文化が全国へ拡大

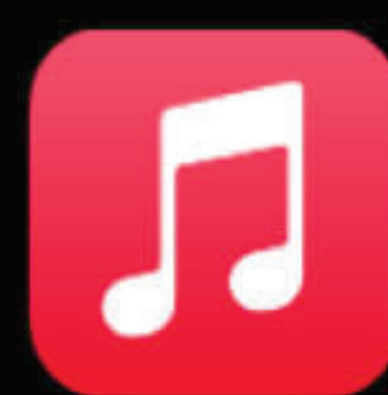
2010年代: ネット時代へ

“地下”から“ネット”を通じて大衆文化へ

2020年~: 多様性と独自性

巨大産業化よりも“リアル”と“多様性”を重視する動きが拡大

## 日本の現状



トップ100

4曲



トップ50

0曲

急上昇チャート

3曲

(10/15 付)

日本レコード協会(2019年調査)

日本・海外のポップス/ロック/ダンスミュージックが上位に  
→ ジャンル分類にヒップホップの項目なし

## 「法律」をめぐる日本とアメリカの相違点

1. サンプリング

日本: 裁判例少なく自主規制中心

アメリカ: 訴訟多く厳格、許可取得が必須

2. 歌詞表現

日本: 放送での自主規制が強い

アメリカ: 表現自由だが訴訟もあり、“Explicit”表示で対応

3. ヒップホップと薬物

日本: 薬物に厳しく活動停止が多い

アメリカ: 復帰が早く合法州もある

## まとめ/考察

- ・アメリカでは社会問題や自己表現と深く結びついて展開し、日本ではエンタメ/ファッションとして受容され独自に展開してきた
- ・日本のヒップポップはJ-POPやアニメ文化との融合が進み、社会的メッセージ性は薄れる傾向
- しかし、言葉による自己表現=ラップは広がり続け、日本ならではの「リアル」と「多様性」を示す場となっている
- 日本のヒップポップの未来: アメリカのような社会運動ではなく、多様なリアルを映す新たな表現として発展して欲しい